

2500人ももの天文学者が集まる巨大イベント、アメリカ天文学会に参加してきました。そこは最先端の情報が飛び交う場でした。

高梨直紘 (東京大学) / 平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

学会。それは研究者が自らの研究成果を発表して同業者と議論する場です。また新たな共同研究者を見つける場でもあり、若手にとっては自分の研究を知ってもらふ就活の場でもあります。目覚ましい成果の記者会見が行われたり、関連機関が展示を出していたり、研究発表以外の様々な会合が行われたりもします。

今回筆者(平松)は、アメリカ天文学会第229回年会に初めて参加しました。会場はテキサス州ダラス近郊の巨大な会議場。主要業務は、学会と並行して行われたアルマ望遠鏡広報担当者会議で、米・欧・チリから集まった担当者と今後の広報戦略プランを策定することでした。2日間の膝詰め議論で何とかプランはまとまりましたが、せっかくなので、会議以外の時間には学会の他の企画も見て回りました。

ひとつは記者会見。日本でアルマの成果記者会見を企画する筆者としては、海

外での様子は気になるところでした。参加したのは、高速電波バーストが発生した銀河を特定したことを知らせる会見です。発表者は5名、それぞれ5分程度で謎に満ちたこの天体の研究背景や手順、成果と意義などを紹介していきます。とてもよく練られていて、発表者数が多い割に短時間にテンポよく中身が伝わってくる発表でした。また会見のネット中継もありました。この成果は雑誌Natureによって報道発表解禁時刻に厳しい制限が設けられていたので、広く一般向けに中継することはできません。事前に登録した記者だけが見られるようになっていましたが、中継を通して世界中から寄せられる質疑応答は非常に活発でした。この発表内容はたくさん報道され、日本でも話題になっていましたね。

次にブース展示。NASAや米国立電波天文台などの研究機関や宇宙関連企業が最新情報を紹介していました。日本と



高速電波バーストの記者会見の一コマ。

の一番の大きな違いは、読ませる展示がほとんど無いこと。ブースにはインパクトのある写真を大きく掲げ、詳しい情報はパンフレットや対面での紹介に任せるという思想でしょう。とりあえず文字情報を並べる、日本で普通のやり方とは大きな違いを感じました。

時間が無くて普通の研究発表を聞けなかったのが残念でしたが、広報の点ではいろいろと勉強になる学会でした。